

PRO MUSICA NIPPONIA

# 日本音楽集団

第130回◆定期演奏会

箏アンサンブルの魅力

1993年9月29日(水)午後7時開演  
津田ホール

主催／日本音楽集団

〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302  
TEL. 03-3378-4741 FAX. 03-3376-2033

# プログラム

## 一．箏四重奏曲

長沢勝俊 作曲

〔 箏 〕 I = 熊沢栄利子 II = 久東 寿子 III = 桜井 智永  
〔十七絃〕 宮越 圭子

私が「箏四重奏曲」を初めて演奏したのは今から15年程前になります。それから度々、演奏する機会がありましたが、その度に新鮮さを感じます。

長沢先生の曲というと、温厚な人柄が滲み出る様な、何かやさしい気持ちにさせてくれる曲が多い中、この曲は他には見られない先生の別の一面がよく現われています。箏ならではの器楽性や、独特ではあるけれど、決して不協ではない和音。又、私の一番好きな部分でもある、それぞれの楽章の始まり方です。1楽章はまるで水が流れ落ちる様に。2楽章は静寂を打ち消す様に、ピッチカートの早い16分音符で始まります。どちらもとても斬新で、これは箏を熟知しているからこそ出来る技なのでしょう。

今宵、お客様にも演奏者にも新しい発見がある様な演奏が出来ればと思っております。

(熊沢 栄利子)

高音を受け持つ箏三面と、低音を弾く十七絃との4パートでできた箏群のクワルテット。四つの箏がバランス良く互いに浮き彫りにされており、二つの楽章が対照的に静と動を表現するように書かれています。

1968年、NHKの委嘱で書かれ、同年に放送初演、日本音楽集団第8回定期演奏会で初演されました。

## 二．箏 双 重

三木 稔 作曲

〔 箏 〕 I = 吉村 七重 II = 木村 玲子

集団に入団したばかりの頃、第三楽章をまるで機関銃のような速さで必死に練習したことを懐かしく思い出します。“双重”というやさしい韻のタイトルと、そのとおりの内容をもったこの曲を、今はやさしく豊かに弾けるかしら？ 相手との穏やかなやりとり、重なり合いの中にも、芯はしっかりと主張するところはする、そんな演奏ができれば幸せです。集団の演奏会で久しぶりに吉村さんと共演できることも、とても楽しみです。

(木村 玲子)

第一楽章は二つの箏が互いに背景になり合いつつ中世的な雅びを歌う緩やかな楽章。第二楽章はやや速くなってどこか西欧教会的な雰囲気を感じることもできるモーダルな世界。第三楽章は急速でダイナミックな掛け合いを持つ変化の多い音楽で構成されています。

1973年、箏三人会で委嘱初演されました。

## 三．箏協奏曲

長沢勝俊 作曲

〔 箏 〕 ソロ = 花房はるえ I = 熊沢栄利子・高橋はるな  
II = 久東 寿子・佐藤 里美 III = 桜井 智永・大泉 一美  
〔十七絃〕 大島菜穂子・城ヶ崎美保

今の世の中、電化製品ひとつみても、便利過ぎると思うことがあります。また別の角度では、「ゴミ問題」「環境汚染」「異常気象」等が話題になっています。これらは人間が文明の進歩にのみ目を向け歩んできた副産物なのでしょう。

文明は確かに素晴らしいものだと思います。しかし、多方面に迷惑をかけて出来上がったものを果して文明と呼んでよいのでしょうか。

人の生き方も同じだと思います。自分が進むためには、他人のことはおかまいなし、というのは人の道に反していると思います。人はお互いに助け合って生きているのです。他人に迷惑をかけてはいけなし、まして、戦争などという残酷なことは許せません。

世界中の人々が協力し、素晴らしい地球を取り戻せる日が一日も早く来ることを願っています。  
“美しい自然を思い、暖かい心でアンサンブルができれば”と思っています。（花房 はるえ）

箏三部と十七絃をともなった協奏曲です。

第一章はゆったりとした感じで、独奏箏は三拍子のリズムにのって充分にうたいます。

第二章は軽快に、かつダイナミックに。アンサンブルと独奏箏との掛け合いと対比の妙を生かすことにより、協奏曲が本来もっている華麗な演奏効果をあげることが出来ます。

1979年、大嶽和久委嘱作品。

—— 休 憩 ——

## 四. 文様 I・II

三木 稔 作曲

〔 箏 〕 I = 花房はるえ II = 木村 玲子

〔十七絃〕 宮越 圭子

〈文様I〉を初めて聴いたのは、まだ聴衆として通っていた頃の集団の演奏会、野坂恵子・坂井敏子・宮本幸子という豪華メンバーの演奏でした。吸い込まれるようなひめやかな音に始まって、うねりが次第に大きくなり、からまりあって高まっていくその音を聴いた時は血液の温度が上がっていきようでした。それ以来この曲はあこがれの曲として私の中に存在し続けたのですが、何回か挑戦の機会を得られたにもかかわらず、満身に弾けたことは一度もないというくやしい曲でもあります。

〈文様II〉の方はその運動性が心地よく、めまぐるしく切り変わるテンポを三人で合わせるのがアンサンブルの難しいところですが、そこはおつき合いの長い気心の知れたメンバー同志、accel. や rit. が自由自在なのが楽しいところです。（宮越 圭子）

文様（あや）Iは、1967年作〈四群のための形象〉の第一曲で十三絃二面と十七絃による箏トリオです。48個の8分音符が紡ぐ美しいオスティナート旋律が繰返される間に、別の官能的なパッサージュがまつわれます。

文様IIは、Iと対をなして演奏するように配慮され1974年に同編成で作曲されました（さわらび会委嘱・初演）。快活ながら雅びを感じさせ、テンポとリズムの変化に富んだ曲です。それぞれ独立した作品ですが、つづけて聞くと、Iが縦糸、IIが横糸となって「和風アラベスク」とでもいふべき鮮やかな音の織物が聞こえてきます。

## 五. 松の協奏曲

三木 稔 作曲

〔指揮〕 高橋 明邦

〔二十絃箏〕 ソロ = 吉村 七重

〔 箏 〕 I = 島崎 春美・城ヶ崎美保 II = 久東 寿子・大泉 一美

〔十七絃〕 大島菜穂子・佐藤 里美

〔尺 八〕 藤崎 重康・米澤 浩

〔三味線〕 工藤 哲子・原田富士江

可動の柱を持つ箏は、どの様な調絃でも作ることが出来ます。しかし、二十絃箏は開発された初期の段階で、ある程度固定した調絃で演奏技術の追求をしました。これがこの楽器の発展と普及をうながしたと言えるでしょう。その推進原動力であった作曲家三木稔氏は、この「松の協奏曲」を作曲した頃には「箏で何でも書ける気がした」と述べておられます。まさにその言葉通り、自由自在に箏のテクニクを駆使して楽器をうたわせています。（吉村 七重）

〈松の曲〉〈松よ〉とあわせ「松三部作」と総称されています。この曲は、松の実会の記念演奏会のために委嘱を受け1984年に作られた曲で、三木作品の中では、極力変化を押えた素朴な手法に徹しながら、ラプソディックな劇性と独奏部のヴィルテュオージティという要点はきっちり保たれています。

世界中で急速に失われていく緑。その緑の永遠を願うという強いメッセージ性を持った作品です。

- 10月5日(火) 川崎北ライオンズクラブ30周年記念演奏会——子供のための組曲、祭り 他  
 pm7:00 川崎教育文化会館
- 10月10日(日) 電力館コンサート「世界に羽ばたく邦楽器たち」——ヴィヴァルディ「四季」より、人形風土記 他  
 ①pm1:30 ②pm4:00 渋谷電力館
- 11月1日(月) <Voice '93>の屋外コンサート出演——人形、子供、巨火より 他  
 上川・昭和記念公園
- 11月4日(木) 京都公演——「四季」ダンス・コン／大津絵幻想を日本舞踊と共演 他  
 ①pm2:00 ②pm6:30 京都府民ホール
- 11月6日(土) 宝塚公演——  
 一部=長沢勝俊特集一人形風土記・トンコリの歌 他 二部=宝塚月組との共演  
 ①pm2:00 ②pm6:00 宝塚バウホール
- 11月26日(金) 柳家小三治&日本音楽集団ジョイント公演——秋の一日、ファンタスマゴリア、落語 他  
 pm7:00 富士市・ロゼシアター
- 11月29日(月) 第131回定期演奏会——秋の総合定期～現代邦楽名曲選  
 pm7:00 津田ホール

〈邦楽器によるロシア音楽～ロシア民謡・剣の舞〉

——CDとカセットテープ 11月21日日本クラウンから全国一斉発売!!

収録曲=剣の舞・だったん人の踊り・くるみ割り人形から・ロシア民謡メドレー 他  
 編曲/秋岸寛久・和田薫・川崎絵都夫

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437